

東亜同文書院記念基金会ニュース

第23号

2021年4月～2022年3月



Contents

基金会ニュース

第28回 東亜同文書院記念基金会授賞式 —02

東亜同文書院記念基金特別奨励賞・荣誉賞授与 —15

発行／愛知大学東亜同文書院大学記念センター

第28回東亜同文書院記念基金会授賞式

第28回東亜同文書院記念基金会授賞式が2022年3月14日、霞山会館にて催されました。

この顕彰事業は、東亜同文書院記念基金会によるものであり、その目的は、東亜同文書院およびその経営母体であった東亜同文会にかかわる研究や調査成果、および啓蒙的活動のうち、顕著な実績を認められた個人、団体や組織を顕彰するものです。東亜同文書院記念基金会を構成する滬友会（書院同窓会。2007年解散）、霞山会、愛知大学東亜同文書院大学記念センターからの推薦により同理事会において選出しており、1993年の第1回表彰以来、本年度で第28回目となります。

これまで、書院生の大旅行に関する研究成果や東亜同文会の資料に基づく研究、東亜同文書院や東亜同文会の出版物のデータベース化事業、東亜同文書院生や卒業生による日中交流に関するメディア報道、その他日中交流の活発な活動などの成果に対して顕彰してまいりました。

第28回、東亜同文書院記念基金会功労賞に殿岡晟子氏が選ばれました。

〔功労賞受賞者〕

殿岡 晟子 氏

東亜同文書院大学の学長また愛知大学の創立者であり、かつ学長も務められた本間喜一先生の長女として書院卒業生と愛知大学および同卒業生との交流を積極的にすすめられました。

また愛知大学に東亜同文書院大学記念センター設置の際には本間喜一先生関係の書院および愛大設立関係の多くの資料や展示品をご寄贈いただき、さらに同センター主催の講演者として、また年報への寄稿にもご協力いただきました。

また毎年秋の日本寮歌祭には数多く御出席、ご支援をいただき、書院先覚や父上の墓参にも参加され墓参後の直会には父上の逸話を紹介され場を盛り上げていただけてきました。書院卒業生ならびに愛知大学の卒業生・在校生に寄り添い繋ぎ本間喜一先生という大きな存在を関係者の心の中に映し続けてこられました。

〔授賞式挨拶〕

川井 伸一 氏

（東亜同文書院記念基金会会長・

愛知大学学長）

皆様、こんにちは。本日は大変お忙しい中、基金会の授賞式にお出でいただき心より御礼を申し上げます。この度は東亜同文書院記念基金会の功労賞を殿岡晟子さんに授与することになりました。ご案内の通り、殿岡様は本間喜一先生のご長女として東亜同文書院、及び愛知大学に対していろいろ貢献、支援いただいたということでございます。授与式での賞状の中になりましたように、本間喜一先生という大きな存在を同窓会等の関係者の心の中に映し続けてこられたということがまさに的確な表現ではないかと思えます。殿岡様は本間先生を一番身近な存在として長年、本間先生と共に生活をされご覧になってきました。本間先生に関する色々なストーリーを優れた記憶力で同窓会等の関係者に生き生きとお話をされ、また記録されたということだと思います。私もそれを通して本間先生の色々な側面を知ることができたということが多々ございます。私は愛知大学同窓会のイ



ベントの場において、またこの基金会の授賞式の場合、さらには小平での本間先生の墓参の折など、さまざまな機会に殿岡様から本間先生の数々のエピソードを伺ったことがございます。また愛知大学におきましては1993年に東亜同文書院大学記念センターが創立されました。センターでは本間喜一先生の記念室がありますが、本間先生ゆかりの色々な貴重な遺品を殿岡様からご寄贈いただき、展示されています。

私が今でもよく憶えています。本間先生の墓参の後の懇談の席でしたか、話題は当然本間先生のことになります。本間先生と田中耕太郎との関係等についてお話を伺った記憶がございます。私自身、田中耕太郎は以前から知っておりました。というのは、私は、かつて中国近代における中国会社法の歴史の変遷について調べたことがございます。中華民国の蒋介石政権が1929年に会社法を制定しました。その際に商法の専門家である田中耕太郎がアドバイザー的な役割を

果たされたというように記録で読んだことがございます。さて、本間先生と田中耕太郎との間に極めて密接な関係があったということですね。後でもご紹介があるかと思いますが、まず第一高等学校、及び東京帝大の法学部において二人は同級生であって、お互いに良きライバルとして勉強し合ったということですね。共に極めて優秀な学生であったということですね。田中耕太郎は高等文官の試験、行政科の2次試験ですが、在学中に首席で合格しました。卒業式では卒業生の首席として表彰されたというようなことがございます。他方、本間先生は今でいう司法試験でしょうか。判事・検事採用の試験において首席で合格されました。このことを含めて学生時代、お互いに親しい関係を結び勉学に励んだというエピソードについて殿岡様からお話を伺いとても印象的でした。

何故このことが重要なのかは、その後の展開があるからです。ご案内のとおり、東亜同文書院が戦争後その歴史を閉じて、その後継の教育機関として本間先生は愛知大学設立に奔走されました。その際に、1946年に設立申請書を行政側の文部省に提出する必要があるわけがございますけれども、たまたまその時の文部大臣として田中耕太郎が就任していたということなんです。愛知大学が設立されたのは色々な関係者のご努力、ご支援があつたことだとは思っています。当時、愛

知大学は旧制大学の1校として今からすれば極めて短期間で認可を受けることができたとのことです。これには2人の親しい繋がりが多少とも貢献したのではないかと想像しています。本間先生と田中耕太郎の間にはもう1回接触する時期がございます。本間先生は大学創立の翌年の1947年、恩師である三淵最高裁長官から請われて最高裁判所に転出し事務総長という要職に就任されました。その在任の最後の段階におきまして、三淵最高裁長官が辞任し、次の最高裁長官に就任したのが田中耕太郎でした。田中は本間先生が引き続き事務総長に留まるよう慰留しました。さらに本間先生が事務総長を辞し愛知大学に戻ってからも、事務総長重任を要請に豊橋にやって来たといわれます。お二人の密接な関係、とくに田中耕太郎の本間先生への強い期待が伺われます。田中耕太郎はその後1950年代、10年間にわたり最高裁長官を勤め、その後、1960年代にはオランダにある国際司法裁判所の判事を勤めました。彼はそのように司法、行政の分野で大きな役割を果たした方でございます。本間先生はおそらく田中耕太郎との関係にみられるように多くの人的なネットワークを広くお持ちであり、それがものごとを進めるうえで大きな強みでもあったのではないかと考えております。その中の1つの典型例として紹介させていただきます。

殿岡様はこの間、大学同窓会や大学関係者、

霞山会の関係者等に対して東亜同文書院大学及び愛知大学時代の本間喜一先生の有り様について生き生きとお話をされてきました。それは極めて大きな意味合いがあると思います。これまでも本間喜一先生については文献を通して研究が進んできております。引き続き本間先生の研究については継続していく必要があると思っております。愛大の東亜同文書院大学記念センターもその面で積極的な役割を引き続き果たしてもらいたいと期待しております。そういう意味で本間先生の考えや行動、歴史的なありさまについての貴重な情報の提供者として殿岡様は大きな貢献されたとは私は理解しております。

以上でございますが、殿岡様には改めましてお祝いを申し上げたいと思います。それでは私の挨拶は以上とさせていただきます。どうもありがとうございます。

〔功労賞祝辞〕

阿部 純一氏（霞山会理事長）

皆様、こんにちは。霞山会の阿部でございます。毎年、この時期になると東亜同文書院記念基金会との授賞式が開催されます。一年はコロナで中止になりましたが、昨年と今年はこうして対面で実現できたことを非常に嬉しく思います。また、この会は霞山会と愛知大学との接点となる非常に重要な会で



ございまして、当会といたしましても非常に重視しているものでございます。

いつも感心するのは東亜同文書院の流れを汲んだ愛知大学は、偉大な方々を輩出されているということでございます。

霞山会は1948年に東亜同文会の遺志を引き継いで再出発してからかなり規模を縮小して今日に至って活動しております。そうした点で愛知大学の活動にはいつも羨望の眼を持って眺めているところでございます。このような機会が持てますのも、愛知大学の川井学長・理事長をはじめ、事務局の方々の御尽力のおかげだと思っております。改めて厚く御礼を申し上げます。

本日、受賞の名に服されましたのが殿岡晟子様でございます。すでに川井学長のご紹介にもございましたように、愛知大学の創設者、本間喜一名誉学長のご令嬢でございます。本間喜一名誉学長のご令嬢でございます。滬友会や愛知大学同窓会、それに関連した催事、会合に非常に熱心に参加され、場を盛り上げる上で大いに尽力されてきたというこ

とでございます。愛知大学豊橋キャンパスにございます東亜同文書院大学記念センターに設けられております本間名誉会長の展示室に展示されている多くの遺品は、殿岡様のご提供されたものと伺っております。川井学長のご紹介の中でも少し触れられておりますが、殿岡晟子様は幼少より占いを学んでこられたそうです。本間名誉学長の幅広い学識を継承されるとともに、一流企業の経営者から非常に厚い信頼を得ておられるとのことでした。その占いは「渋谷の母」として高く評価されているそうです。占術という方法を使って現代の悩める人々に寄り添うわけでございます。占いをご専門にされている方です。今このコロナの状況、日本の将来はどうなるのか。あるいはウクライナ戦争ですね。この帰趨はどうなるのか。台湾海峡の緊張はどうなるのか。占いで見るとどういふことがいえるのかということをお伺いしてみたいと思います。

最後に受賞者の殿岡さんをはじめ、本日出席の皆様方のご健勝を心からお祈り申し上げます。粗末なご挨拶かと存じますけれども、お祝いの言葉にかえさせていただきます。本当に本日はおめでとうございました。

〔功労賞推薦の辞〕

中島 寛司氏

中島でございます。それでは殿岡晟子（あきこ）さんの推薦の辞の前に本間先生と東亜同文書院がどういうふうにできて、終戦で引き揚げて愛知大学ができるまでのお話について簡単に触れてみたいと思います。

先ほど川井学長の方から触れられた点について多少重複するかもしれませんが、お話をしてみたいと思います。

何度も触れますように本間先生は東亜同文書院大学の最後の学長さんです。愛知大学が1946年11月15日に創立ですが、その前に文科省から仮の認可というのが出ています。正式には11月15日、これが現在大学の創立記念日になっております。その時の総理大臣が吉田茂。文部大臣が先ほどからお話に出ている田中耕太郎さんでした。そういうこ

とで、縁があつて早く認可されたということもあるかも知れません。

当時、開学についてはGHQも絡んでおり、愛知大学の開学についてもGHQの関与というか、妨害というか、そういうのも絡んでおります。東亜同文会が解散というか、活動停止に追いやられたとも聞いております。そんな吉田さんと田中さんの理解というか、そういう関係でスムーズに認可がされたということも聞きます。吉田さんは外務省にいて南京の領事館に居た時に書院を訪問しております。そういう関係で愛知大学創立には理解があつたのではと聞いております。

大学を作る時には校舎だとか色んな備品が必要となります。校舎は豊橋の旧陸軍第15師団司令部の建物を使う。後に購入するわけです。その他、本、備品などが必要になるわけです。その中に東亜同文会所有の霞山文庫3万5千冊。1946年12月に当会等の間で締結された保管、利用契約に基づき東京から運び込まれて図書館が充実をしました。現在も豊橋図書館の5階に保管されております。

東亜同文書院の卒業の年次に5、6名のチームを組んで広範囲の大旅行をしておりま

す。コースとしては700位であると聞いております。大旅行記の記録を当時、3部作って1部は東亜同文会へ。1部は外務省へ。1部は上海の大学の方へ置いていました。終戦の時に上海の大学の分は北京国家図書館の方へ接收されて、現在も保管されてい

ます。

東亜同文会の方へ送られた分が愛知大学の方へ寄贈され、同じく豊橋図書館の5階の空調付きの部屋に保管をされております。北京の国家図書館の分については完全復刻されて出版をされております。愛知大学の東京事務所の方にその復刻版がどういうわけか全部はなくて20巻ぐらいのものがありません。これを見ると20歳前後の人が書いたにしていると言ふと失礼ですけども、非常に文章もしっかりしているし、見方もしっかりしていろいろいった調査旅行の記録というものは世界的に見ても珍しいというか、尊いというか色んな手本になつていふことを聞いております。

終戦のために本間先生や職員とか学生が上海に帰ってくるわけですね。校舎とか宿舎は全部、中国当局に接收されて使えなくなつていたので、それを色んな関係があつた人を通じて居場所を確保したと。帰国するまで相当期間がかかりましたけど、その間の費用を捻出するのにどうしたか。これは前の同文書院の敷地の売却だとか、あるものを物に代えて、金塊に代えて、車も外車なんかを買つたらしいですけど。そういうことに必要なら時に現金に換えた。それらの保管管理を本間先生の一ツ橋大学時代の信用のおけるゼミ生に預けた。必要に応じて現金に換えてもらつたと。インフレの恐ろしさを、ドイツ留学時に体験した本間先生が、その時に応用したというふう聞いております。



帰国の際はまとまって帰るといふふうになつて持ち物に制限があり各自2箱ぐらいにして帰つたと聞いています。その時に成績簿、学籍簿を完全な形で持ち帰り今も豊橋の方に保管をされております。海外にあつた大
学、教育機関で完全な形で学籍簿や成績簿が残っている所は少ないと思います。今でも書院の本人が申請すれば成績表を発行してくれます。料金は幾ら位だったですかね。200円か300円か。

書院の創立100周年の時に豊橋と当時の三好校舎を見学に回つた時に一緒に来たご家族の方に書院卒であるご主人が、自分は非常に成績が良かったといふふう
に自慢をしておると、本当でしょうかと相談されました。良くないことですけども、教務課に頼んで発行して送つて貰うことにしたのです。送つてもらふのが自宅じゃまずいので、妹さんか誰かの家に送つたと。その中身を見て確かにご主人が言つてゐる通り成績が良かったといふことで惚れ直しましたといふ話を聞きました。皆、優秀だつたと思ひますけども。大学の場合は頭が良くても点数にこだわらずに自由に生活しておつた人もいますから。その辺りはご本人の言動が一致しておつたといふこと
でございます。長くありませんでしたけども。こういうふう
に当時の東亜同文会の方から色んなご支援を受けて、愛知大学が創立発足できたといふことになりました。

それでは遅れましたが、殿岡晟子さんについて紹介させていただきたいと思ひます。前から触れているように、本間先生の長女であります。お兄さんが2人いらっしゃいます。殿岡晟子さんの旦那さんは書院45期の殿岡昭さんです。旧制の愛知大学に編入し昭和25年に卒業して
います。

私は愛大に入つたのは昭和29年、卒業は昭和33年。在学中とか社会に出ても在職中には殿岡昭さんや晟子さんとの面識は全然ありませんでした。その後、滬友会の皆さんと色々なお付き合いをするようになりました。

滬友会のお付き合いといふのは春と秋に行う滬友ゴルフ会。それから根津先覚の春の桜花忌。命日の2月ですが寒いので、関東の場合は初夏の頃にやろうといふことで4月上旬に行つていました。荒尾先覚の場合は全生庵で命日の10月下旬に行つて
いました。

(故)近衛通隆会長さんはゴルフが非常にお上手で、春秋の滬友ゴルフ会もほとんど出て参りました。成績はいつも上位でした。私もたまたま近衛さんと、春のゴルフ会
で回つたことがあります。恥ずかしくないようにしようと思つてプレーして
いたのですが下手は下手、「ゴルフなんてあんまり力を入れないでも飛ぶんですよ」と言われたことを今も思ひ
だします。

滬友会の皆さんと中国に親善ゴルフに行つたこともあり
ます。団長が近衛さん、秘書長が42期の小崎さんでした。私は連絡係とし

て参加しました。中国ではゴルフが始まつたばかりで、マナーについて我が方からクレームもありました。でも懇親会は楽しいものでした。

愛知大学現代中国学部は先ほどの書院の大旅行にちなんで、中国の大学・機関と愛大の中国学部生が、協働で現地調査をし、終日の発表会、その後のレセプションと有意義な一日を体験しました。発表会の日程を確認して、5日から7日位のツアーを旅行会社と相談の上、案内状を作りました。お元氣な滬友会の皆さんが大勢参加して呉れました。その時に殿岡晟子さんは紅一点といふことで皆さんから非常に大事にされました。

各地の名所旧跡を観光すれば、中国生活の体験もあつて、皆さん親近感もあつて楽しんでいました。各地の食事も楽しい。紹興酒は予算的なこともあつて5年物にしてしまつたが、店員を呼び、おかわりに15年物を持つてこいと注文されるとガクツと予算が狂つてしまふのです。次からは、5年物を出してこれ10年物です！とカンパイしたものでした。

滬友会と愛大の同窓会が一緒に参加する行事に寮歌祭がありました。愛知大学の場合には旧制大学でしたから、愛知大学予科として出ておりました。当初はきっかけがなく、参加出来なかつたのですが、書院40期の秋山征士さんが推薦状を書いていただいて参加できるようになりました。現在の日本寮歌振興

会の会長は今日お見えの高井会長がやっております。

各校寮歌の高唱が終わったあと、日比谷公会堂の階段にずっと並んで写真撮ることにしていました。大勢の書院生が写っています、今はほとんどお亡くなりになりましたけども。

先ほども学長の方からありましたけども、本間先生の墓参は大学が主宰し、同窓会が執行しています。最初は滬友会の方々が全部やっつて呉れておったのです。滬友会が解散したから愛知大学に移管されました。

小平霊園の墓前に拝礼し、皆で般若心経を唱えて院歌、寮歌を献じ、そこで写真を撮って、直会の会場に移り、歓談すると。コロナ禍で2年ばかり中止になりましたが。

その時に学長からも話があったように、殿岡晟子さんがユーモアたっぷりにお父さんの色んな思い出話をされました。晟子さんは本間先生の学長時代には秘書的な役目もされてきました。記念センターの本間先生の展示コーナーにも積極的な協力を頂いております。以上のように、殿岡晟子さんは、中国ツアー、各種の墓参、寮歌祭、基金会、その他多くの催事に参加され、愛知大学、霞山会、滬友会、同窓会等の交流・発展に多大な貢献をされました。これをもって、私の晟子さんの功労賞推薦の辞とさせていただきます。どうもありがとうございます。

〔受賞挨拶〕

殿岡 晟子氏

本日は、お誉めの御言葉をいただき恐縮に存じます。父本間喜一が、あの世でどんなに喜んでおりますことか、多分「中国語だったら（不^フ敢^{カン}当^{ダン}）」と云うのだよ」と教えてくれた事でしょう。私が愛知大学の昔を良く覚えていると、皆様が云われますが、私にとりまして愛知大学は自分の分身の様に思えるからなのです。自分の成長の物指に合わせて、大学の発展を並べて考えてしまうのです。大切な、大切な思い出でございます。そして、すべての記憶を、高速冷凍し必要な時に取り出してまいります。

父が上海の東亜同文書院に参る頃より私は、本間家のヤングケアラーでした。終戦後の物のない時、豊橋には、それなり



の食べ物がありました。宿屋やホテルはままならず、お米を持参して参らねば、宿はとれませんでした。ですから室数の多くある公館は、日本各地より講義においでの方、先生方の宿となりました。お手伝いさんもおりましたが、やはり父と相談し、先生方の健康第一と考えて、東京を離れられない母を残し、私が父の世話を豊橋でする事になりました。学校も現在（東校）と呼ばれる女学校に転校いたしました。

父は大学の仕事で、あちら、こちらを駆けずり廻る生活でした。その時、一大事件が持ち上ったのです、GHQの命令により、日本に、最高裁判所が出来る事になったのです。その長官にお成りになる方が、よりによって父が裁判所に初任官した時の直属の恩師であり、人生で一番尊敬する、三淵忠彦先生でした。そして三淵先生は「本間君が自分の所で事務総長を引き受けてくれねば、自分は長官をいたしません」とおっしゃるのです。父は本当に苦しみました。しかし、幸運の四葉のクローバーは、父の足元に敷きつめられておりました。豊橋市より大学の予算に相当する金子^{キンズ}が、ただけの事になったのです。当時の市長のお言葉です。「先生、御安心下さい。どうぞ日本のために最高の裁判所を作り上げて下さい。」父はどれ程うれしく、安心したか判りませんが、その後の父の働き方を見れば、GHQからは、「アンチ・アメリカ」と云われようが、ピストルで脅かされようが、父

は正道をくずさず、歩んで来ました。父は何も残っていない焼け野原の日本に、新しい裁判所を作り、全国を自分の目で確かめなければなりませんでした。

こんな例があります。北海道のある市に到着した父を迎えたのは、駅前待っていた赤い色の消防車でした。市役所の方々が、列をなしてお待ちでした。父は困惑し、もしも、市内に火災でもあると困るから、電車に乗ると断りました。ガソリンも車もたりない日本の戦後の姿でした。

夏休みになると、父が私を必要だから東京にもどる様になるといふことになり、私は女子学院に復学いたしました。元書院の学生で、当時愛知大学生だった、大野一石さんの母上が公館に来て下さり、妹君2名も同居なさるので、私は安心して豊橋を後にしました。父は長官の三淵先生をお守りしながら、あらゆる事に気をくばり、長官のお名前に汚点をつけず、ただひたすら、日本の法律を守りました。長官が亡くなられますと、自分の親友の田中耕太郎先生を二代目の長官にすえて、なんの未練もなく、豊橋に飛んで帰りました。も議論、そんな事が出来たのも、自分が全国の裁判所より、えり抜いたエリートの方々が事務局にいらしたからだ、私は思っております。私は父と一緒に豊橋に参り、昔の父の室で、父のつぶやきを聞きながら、先生方のお世話を始めました。学校屋の娘が、出席日数がたりないなど笑ってしまいますねえ。女子学院

は千代田区麹町にあります。母方の女性達が学んだミッシェンスクールで、私で5代目となります。週5日制でした。自分の家と同じ様に我が儘が出来ました。まだファックスなどありませんでしたから、豊橋から急な用事の時や、文部省にとどける書類など、セーラー服姿でとどけに行きました。家庭科だけは先生の助手として、天才的なエリートのクラスメイト達に料理を教えるのは、私にとって大変に気分の良い時間でした。のちに、これが豊橋で、先生方のお世話におおいに、役に立ちました。先生方の御生地を知ることが、その方の好みの味の第一歩でした。産地の名物などもしらべました。お出した食事に、お手の附く回数で、お好きな食べ物も良く判り、ノートに書いておきました。お風呂もショートパンツ姿で頑張りました。大学からの食費は如何ほどか存じませんが、毎食御馳走は出来ませんが、父のポケットマネーで恥をかかないよう気をつけました。

公館の部屋には飾り物がありませんので、東京の家の倉から、書画骨董を日通の美術車で豊橋に持っていく室々に飾りました。豊橋市の美術館には「松林桂月」の品が無いと聞きましましたから、「四君子」を送りました。田原の有名な渡辺崋山の弟子ですから、豊橋市にないのはおかしいと思っただけです。私からの豊橋市への少しばかりの感謝の気持ちでした。父は「晟子の物だから、好きにしなさい」と云ってくれました。

同文書院40期の賀来^カさんから「現中の学生達を応援に中国旅行に行くのだが、人数がたりないと、旅費が高くなるから、晟子さんも行ってくれませんか？」とお誘いの言葉がありました。お仲間にいれて下さることは光栄でした。もち論、2ツ返事でお供することになりました。まるで、通訳者の輪の中に居るような旅でした。しかし皆様方御高齢のメンバーでいらしたので、有事の時のため医薬品や日本の食品なども用意いたしました。が大変に役に立ちまして、うれしゅう存じました。40期の御家族より「殿岡さんが行くなら安心だ」と云うお言葉をいただいた時は、責任重大と心を引きしめました。

旧制高等学校の寮歌祭の時は、チャイナドレスを身にまといました。手作りの男子用も4枚作り着ていただきました。又、父が若い頃教えていた、大学の受け附をめぐり、素敵な折り詰弁当を頂いて参り、書院や愛大のテーブルをにぎやかにいたしました。解散後の夜の銀座は、よりのしゅう存じました。

父はなによりも学生達を愛しました。自分が戦場に送ってしまった学生たちに約束しました言葉があります。「命を無駄にするな」「生きて帰って来い」「この戦争は勝つても負けても、それからの日本に必要なものは、君達なんだから」などです。ですから、命を掛けて書院の学籍簿、成績簿等を持ち帰りました。自分の身と引きかえにする覚悟でした。そして約束通り、引揚げ半年で無一文で、皆

様のご協力を得て新しい大学を作り上げたのです。そんな父のそばで育った私は、書院も愛大も私にとっては、大切な大切な大学なのです。定年で愛大を去る先生方に伺いますと「なんとなく、居心地が良かったから定年まで過ごしてしまった」と書いて有ります。本音でしょう。

有る卒業生は、父が校庭をゆったりとワイシャツ姿で歩き学生達の野球を見ている背中をながめて、象のような大きな人なのだと感じたそうですし又、安心感をおぼえたそうです。私も幼い頃より父の暖かい広い背中が大好きでした。書院と愛大は私に取って人生そのもののような気がいたします。

少女時代より、書院と愛大は時には私達家族より父を取り上げる様な時代もありましたが、終り良ければすべて良しと思える様になりました。森羅万象に残した父の愛情は今も、娘の上に燦々とふりそそいでおります。御清聴ありがとうございます。



第28回記念賞授与の様子



阿部 光さんより花束贈呈



藤田名誉教授より花束贈呈

東亜同文書院記念基金会 記念賞・功労賞・奨励賞のこれまでの受賞者

第1回 平5(1993)年度 記念賞	平成5(1993)年11月5日 上海交通大学 中日科技研究会(翁史烈(当時の上海交通大学学長)が会長) 科学技術及び教育に関する日本の資料を中国の学生向けに刊行するなど日本事情を中国に紹介する活動を行っている。(東亜同文書院大学45期専門部卒業生吉川信夫氏は私財を投じて同会を支援した。)
記念賞	谷 光隆氏(元愛知大学教授) 大旅行調査を研究 大運河調査報告書を刊行。
記念賞	菅野俊作氏(東北大学名誉教授 41期) 中国人留学生を支援。
第2回 平6(1994)年度 記念賞	平成6(1994)年9月16日 林文月氏(台湾大学名誉教授) 源氏物語他を中国語に翻訳刊行。
記念賞	栗田尚弥氏(埼玉大学講師) 「東亜同文書院 日中を架けんとした男たち」を刊行。
記念賞	白川正雄氏(42期) 戦後スマトラに永住し戦火で消失したモスクを再建。
記念賞	村上和夫氏(長野県中国文化研究会副会長) 中国古代瓦当文様の研究を刊行。
第3回 平7(1995)年度 記念賞	平成7(1995)年9月13日 藤田佳久氏(愛知大学教授) 大旅行調査報告書を解説し「中国を歩く」等を刊行。
第4回 平8(1996)年度 記念賞	平成8(1996)年9月6日 ダグラス・レイノルズ氏(ジョージア州立大学歴史学部副教授(注:肩書きは受賞当時)) 東亜同文書院の大旅行調査を研究し、それが戦後米国で発展した地域研究(Area studies)よりも古い歴史を持つ優れたものであることを検証し「地域研究の知られざる起源日本の東亜同文書院」を刊行して広く世に紹介した。
記念賞	陳 弘氏(44期) 日中要人の会談の通訳 人民日報東京特派員として友好促進に貢献。
第5回 平9(1997)年度 記念賞	平成9(1997)年10月7日 遠山正瑛氏(鳥取大学名誉教授) 日本砂漠緑化実践協会の設立ボランティアを指導し内蒙古砂漠に植林。
第6回 平10(1998)年度 研究奨励賞	平成10(1998)年9月24日 薄井由氏(上海復旦大学修士課程) 「東亜同文書院大旅行初歩研究」を中国で出版予定書院の業績を中国で紹介。
研究奨励賞	水谷尚子氏(日本女子大博士課程) 書院中華学生部を研究し論文「東亜同文書院に学んだ中国人」で同学生部の業績を紹介。

第7回 平11(1999)年度 記念賞	平成11(1999)年9月28日 翟新(テキシン)氏(上海復旦大学大学院修士課程修了 慶應義塾大学大学院法学 研究科後期博士課程) 東亜同文化の日中近代史における足跡を研究、再評価する論文を発表。
研究奨励賞	劉 永誌氏(愛知大学大学院文学研究科博士後期修士課程 博士学位取得) タクラマカン砂漠の困難な現地調査を行い、その日本語論文は辺境の地誌学的 研究として高く評価された。
第8回 平12(2000)年度	平成12(2000)年9月29日 名古屋テレビ「青春の中国」取材班 東亜同文書院の「日中の架け橋を」という理想に生きた書院生の青春とそれを 現代に受け継ぐ愛大学生の姿を生き生きとテレビで紹介。
第9回 平14(2002)年度	平成14(2002)9月26日 西所正道氏 「上海東亜同文書院風雲録」を刊行。卒業生たちの足跡を追うことにより、東亜 同文書院の建学の精神が世紀を越えて現代に生き続ける姿を広く世に紹介。
第10回 平15(2003)年度 記念賞	平成15(2003)年9月24日 工藤俊一氏(元北京大学文教専門家) 「北京大学 超エリートたちの日本論—衝撃の「歴史認識」」を刊行。各方面から 高い評価を得た。
第11回 平16(2004)年度 記念賞	平成16(2004)年9月29日 今泉潤太郎氏(愛知大学名誉教授) 「愛知大学『中日大辞典』」の編纂に長年献身的に力を注ぎ、同辞典の内外にお ける高い評価の形成に多大の寄与をした。
第12回 平17(2005)年度 記念賞	平成17(2005)年10月7日 大森和夫氏(国際交流研究所長)・弘子さん夫妻 日本語教材を中国の大学に寄贈するなど日中文化交流活動を続けた。
第13回 平18(2006)年度 記念賞	平成18(2006)年12月8日 テレビ宮崎 強制連行で過酷な労働を強いられた中国人労働者を親身にかばった勇気ある日 本の青年の精神と行動力のルーツを辿るヒューマンドキュメンタリーを制作放送 した。
奨励賞	成瀬さよ子氏(愛知大学豊橋図書館司書) 内外のぼうだいな資料を収集整理し貴重な「東亜同文書院関係目録」を作成刊 行した。
第14回 平19(2007)年度 記念賞	平成20(2008)年1月29日 浅川義基氏 北京国際元老テニス大会に連続20年間出場する中で、会の推進的役割を果た し、日中友好と国際親善のために尽力した。

<p>第15回 平20(2008)年度 記念賞</p>	<p>平成21(2009)年1月30日 工藤美代子氏 著書「われ巢鴨に出頭せず」において文麿公の行動を論理的に検証したが、これは東京裁判史観を根底から覆す程の功績があった。</p>
<p>第16回 平21(2009)年度 記念賞</p>	<p>平成22(2010)年1月27日 葉敦平氏（上海交通大学校史研究室教授） 東亜同文書院の上海交通大学キャンパスの占用、両校の近隣同士の友好関係などを、史実に基づき組織的に研究し、「資料選集」を編集。</p>
<p>第17回 平22(2010)年度 記念賞</p>	<p>平成23年(2011)年1月26日 小坂文乃氏 著書「革命をプロデュースした日本人」で、孫文に対し多大の援助を与えながら「一切口外シテハナラズ」として革命運動の隠れた援助者であった梅屋庄吉の生涯を明らかにした。</p>
<p>記念賞</p>	<p>愛知大学中日大辞典編纂所 鈴木擇郎先生らにより計画された東亜同文書院中国語教育のシンボルともいべき辞典編纂に長年取り組み中日大辞典第三版を刊行。</p>
<p>第18回 平23(2011)年度 功労賞</p>	<p>平成24年(2012)年1月24日 藤田佳久氏（愛知大学名誉教授、愛知大学東亜同文書院大学記念センター初代センター長） オープン・リサーチ・センター事業実施。東京・中日・北陸中日新聞連載「東亜同文書院の群像」執筆。</p>
<p>奨励賞</p>	<p>武井義和氏（愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員） 「孫文を支えた日本人」出版。「中国における東亜同文書院の『資料選集』」翻訳。</p>
<p>第19回 平24(2012)年度 奨励賞</p>	<p>平成25年(2013)年1月25日 保坂治朗氏 それまで東京同文書院の実態が幻的存在であったのを実像化した点で先駆的であり、当記念センターの書院研究で当初からなかなかアプローチ出来なかった空白部分を埋め、時代背景にも言及されつつ東亜同文書院のある種原点を解明された。</p>
<p>奨励賞</p>	<p>有森茂生氏 東亜同文書院関係の図書、資料文書、写真、レコードなどを2008年以来ほぼ毎年のように寄贈され、愛知大学東亜同文書院大学記念センターの展示や研究に貢献された。</p>
<p>第20回 平25(2013)年度 記念賞</p>	<p>平成26年(2014)年1月28日 岡部達味氏（東京都立大学名誉教授、霞山会元理事） 中国政治・中国外交を専門とした学術研究に加え、メディアを通じて我が国論壇としてリードする役割を果たされた。1997～2001年には日中友好21世紀委員会日本側座長を務められ、日中間の相互理解促進に大きく寄与された。</p>

<p>第 20 回 平 25 (2013) 年度 功勞賞</p>	<p>平井誠二氏 (公益財団法人 大倉精神文化研究所 研究部長)</p> <p>東亜同文書院卒 3 期生大倉 (旧姓江原) 邦彦氏が戦前設立した大倉精神文化研究所の研究員として、同研究所の研究活動を企画運営されている。東亜同文書院関係にも強い関心を持ち、多くの史資料収集を行なうとともに、機関誌『大倉山論集』に多くの研究者を動員して、その成果を集積されている。</p>
<p>第 21 回 平 26 (2014) 年度 記念賞</p>	<p>平成 27 年 (2015) 年 1 月 27 日</p> <p>北川文章氏 (霞山会顧問、霞山会元理事長、山一証券元副社長)</p> <p>日中間の文化交流事業、留学生交流事業、日中間の相互理解の推進に尽力されたことにより、中国上海交通大学及び浙江大学より顧問教授に任命されるとともに、揚州大学より名誉教授の称号を授与された。霞山会理事長就任時には愛知大学理事も兼任され、史実に基づいた「上海交通大学と財団法人霞山会の歴史関係に関する共同研究」に尽力されるなど、国際研究交流事業推進に多大な貢献をなされた。</p>
<p>功勞賞</p>	<p>仁木賢司氏 (ミシガン大学上級ライブラリアン)</p> <p>東亜同文書院関係の文献資料を精力的に収集し、ミシガン大学等の研究者へその提供および指導をされ、アメリカにおける東亜同文書院研究のベースをつくられた。2009 年には「ミシガン大学の東亜同文書院およびアジア系文献史資料のデジタル化」、2014 年には「書院との出会いと史資料」と題して愛知大学で講演され、東亜同文書院大学記念センター発展への期待を力説された。</p>
<p>第 22 回 平 27 (2015) 年度 記念賞</p>	<p>平成 28 年 (2016) 年 1 月 22 日</p> <p>小崎昌業氏 (東亜同文書院大学第 42 期、愛知大学第 1 期、在モンゴル特命全権元大使、在ルーマニア特命全権元大使)</p> <p>東亜同文書院大学の第 42 期生並びに愛知大学 (旧制) の第 1 期生として、歴史的に関わりが深いこれら 2 つの大学の発展のために、一般財団法人霞山会を理事、また顧問として、同時に、学校法人愛知大学の監事も務められるなど、生涯を懸けてご尽力されてこられた。</p> <p>また、外交官としてのご活躍、東亜同文会の昭和期の諸活動の取りまとめ、愛知大学に引き継がれた現地主義教育へのご指導など、実質を伴ったご功績を残してこられた。</p>
<p>第 23 回 平 28 (2016) 年度 功勞賞</p>	<p>平成 29 年 (2017) 年 2 月 1 日</p> <p>村上武氏 (回光会・東光書院院長)</p> <p>東亜同文書院 18 期生で、中華学生部の教員を務められた父、村上徳太郎氏の御子息。父は、東亜同文書院の生みの親である荒尾精、近衛篤磨、根津一の三先覚 (聖人) を祀った靖重神社のご神体を帰国後ご自宅 (埼玉県) に東光書院を興して祭られた。武氏は、父を継承しご神体を祀られてきた。</p> <p>あわせて、荒尾精が志した中国、東アジアとの共同、および実践の精神を評価し、著書や伝記を復刻したほかそれをふまえ、評論紙「回光」を月刊にて発刊し、啓蒙活動を進め、2015 年には、『日清戦勝異論』を刊行し、荒尾精を顕彰する諸活動に尽力なされた。</p>

<p>第24回 平29(2017)年度 記念賞</p>	<p>平成30年(2018)年3月28日 山田正氏(霞山会元理事長、愛知大学元理事)</p> <p>一般財団法人霞山会の理事(2006~2015年)、筆頭常任理事(2007年)、理事長(2008~2014年)をつとめられ、文化・教育、学術・研究交流分野の発展に尽力され数々の業績を残された。また、2008年4月より愛知大学理事に就任され、当会と愛知大学の繋がりをより緊密にされた。</p> <p>霞山会の広報誌『Think Asia』を創刊し、アジア諸国・地域の社会、歴史、文化に関する情報の提供に尽力され、学術・研究交流では、上海交通大学および上海市日本研究交流協会、北京の中国国際交流協会、中国教育国際交流協会等各機関との研究者の相互交換、共同研究、シンポジウムなどをおこない学術研究交流の活性化をはかられた。</p>
<p>第25回 平30(2018)年度 功労賞</p>	<p>平成31年(2019)年3月6日 中島寛司氏(愛知大学同窓会元神奈川支部長)</p> <p>愛知大学同窓会のリーダーとして滬友会、霞山会、愛知大学が主催する多岐にわたる行事にかかわり、東亜同文書院卒業生と愛知大学関係者とのつなぎ役を担われるなど、人望と行動力は第一人者である。</p>
<p>第26回 令元(2019)年度 記念賞</p>	<p>令和3年(2021)年3月10日 星 博人氏(東亜学院元院長)</p> <p>総合商社丸紅を退職後、霞山会常任顧問に就任。翌年から東亜学院長を兼務し18年間中国との文化・学術・教育交流の発展に尽力された。また「霞山会と上海交通大学の交流史、現状と今後の発展趨勢に関する学術研究」の参画者として東亜同文書院が上海交通大学を借用した事実関係を解明するなど大きな成果を上げられた。</p>
<p>第27回 令2(2020)年度 記念賞</p>	<p>令和3年(2021)年3月10日 大城立裕氏(予科44期)</p> <p>動乱の戦時下、学徒出陣を体験。沖縄帰郷後は仕事の傍ら、それまでの経験を踏まえた数々の小説を発表。「芥川賞」「平林たいこ文学賞」など多数受賞。国からは、1990年 紫綬褒章、1966年 勲四等旭日小綬章を受賞された。沖縄の人々からも「知の巨人」として絶大な支持を集め、沖縄琉球文化の発展などに偉大な功績を残された。</p>
<p>第28回 令3(2021)年度 功労賞</p>	<p>令和4年(2022)年3月14日 殿岡晟子氏(本間喜一名誉学長のご長女)</p> <p>東亜同文書院大学の学長また愛知大学の創立者でありかつ学長も務められた本間喜一先生の長女として書院卒業生と愛知大学および同卒業生との交流を積極的に進められ、本間喜一先生という大きな存在を関係者の心の中に映し続けてこられた。また、愛知大学東亜同文書院大学記念センター設置の際には多くの貴重資料を寄贈する等、センターの運営・活動に多大な貢献をなされた。</p>

表紙参加者ご芳名(敬称略、順不同)

高橋幸紀 齊木正嘉 近藤智彦 大滝則忠 村尾竹一 畑野 勇 三好 章 森 健一 平井誠二
 藤田佳久 水野紘治 高井和伸 川井伸一 淀野敏男 有森茂生 釜井卓三 殿岡晟子 中川善弘
 伊藤登美夫 阿部純一 夏目益良 六鹿茂夫 クリストファー・スピルマン 中島寛司 栗田尚弥
 阿部 光 梅村博文 伊藤綾子

Zoom 参加 岡村勘吉

東亜同文書院記念基金特別奨励賞 東亜同文書院記念基金栄誉賞 授与

東亜同文書院記念基金会では、書院への理解を深め、伝統を引き継いでいくことを期待して本学学生へ2種類の表彰をしております。1999年度より「東亜同文書院記念基金栄誉賞」を設け、学位記授与式において、人物・学業成績が優れた者を表彰しています。

また、2013年度より「東亜同文書院記念基金特別奨励賞」を設け、入学式において入学試験の成績が最も優秀な入学者に対して、同賞を贈っております。

東亜同文書院記念基金 特別奨励賞

【2021年度受賞者】

経済学部 浅井 暖登
あさい はると
ひしかわ ゆうた
文学部 菱川 雄太
ひしかわ ゆうた

東亜同文書院記念基金 栄誉賞

【2021年度受賞者】

現代中国学部 長屋 敦大
ながや あつひろ
あつひろ 敦大
地域政策学部 柘植 さゆり
つげ さゆり



【基金役員名簿】

(2022年2月時点)

会長

川井 伸一
(愛知大学理事長・学長)

副会長

阿部 純一
(霞山会理事長)

理事

藤田 佳久
(愛知大学名誉教授)

六鹿 茂夫
(霞山会常任理事)

三好 章
(愛知大学東亜同文書院大学
記念センター長)

近藤 智彦
(愛知大学事務局長)

監事

岡村 幹吉
(岡村会計事務所)



国際シンポジウム

- 2016年 「東亜同文書院卒業生たちの軌跡を追う」
- 2015年 「近代日中関係史の中のアジア主義-東亜同文書院と東亜同文会-」
- 2014年 「東亜同文書院の中国研究-その現代的意味」
- 2013年 「近代日中関係史の中の東亜同文書院」
- 「孫文と東アジアの平和」
- 2012年 「近代台湾の経済社会変遷-日本とのかかわりをめぐって-」
- 2011年 「辛亥革命・孫文・東亜同文会」
- 2010年 「戦前外地にあった愛大ルーツ5校の出身学生が語るアジアと愛大」
- 2009年 「欧米研究者から見た東亜同文書院」
- 2008年 「東亜同文会の東アジアにおける教育活動とその展開」
- 2007年 「日中研究者による東亜同文書院研究」
- 「世界と日本の大学史の流れの中での東亜同文書院と愛知大学」

展示会・講演会

- 2019年 高松
- 2018年 岡崎
- 2017年 浜松
- 2016年 名古屋
- 2015年 松本
- 2014年 広島
- 2014年 岐阜
- 2013年 長崎
- 2012年 沖縄
- 2011年 富山
- 2010年 名古屋
- 2010年 米沢
- 2010年 京都
- 2009年 神戸
- 2009年 シカゴ
- 2008年 福岡
- 2008年 弘前
- 2007年 東京
- 2006年 横浜

出版物

- ・同文書院記念報 (vol.30まで刊行)
- ・ブックレット (第9巻まで刊行)
- ・愛知大学創成期の群像 など

愛知大学記念館

愛知大学東亜同文書院大学記念センター

《開館時間》月～金曜日:10時～16時 《閉館日》土・日・祝および大学の定める休日